

2010 年度 SEAMEO RELC Seminar に参加して

石川 慎一郎 (神戸大学)

■SEAMEO RELC Seminar とは？

SEAMEO RELC Seminar とは、東南アジア文部閣僚機構 (Southeast Asian Ministers of Education Organization : SEAMEO) が設置した東南アジア地域言語教育センター (Regional Language Centre : RELC) の主催する国際研究セミナーのことである。SEAMEO RELC は「言語教育は域内国民の生活の質の向上および国際協力の拡大に通ずる」という基本方針を唱えており、そうした認識の上に「域内の言語教師教育の育成および言語専門家間の国際協力の推進」を測ることを使命としている。シンガポールにある本部は、ホテルや教室を併設した独自の施設を所有しており、応用言語学修士課程を含む数多くの長期・短期の言語コースを提供している。最近では、日本の大学でも RELC に学生を送って英語研修を受けさせる例が増えているようである。なお、本年の会議は APEC との共催で行われたため、会議の正式名称は Inaugural APEC-RELC International Seminar とされた。

■会議の概要

会議は 2010 年 4 月 19 日から 21 日の 3 日間にわたって行われた。参加者は 400 名以上である。初日には開会式があり、シンガポールの S. Iswaran 上級国務相 (商務・文部担当) が開会スピーチを行い、その後、香港大学の Amy Tsui 教授が大会テーマ (Language Education: An Essential for a Global Economy) についての報告スピーチを行った。壇上には域内の国旗が並び、各国のシンガポール駐在大使やシンガポールの政府役人などが数多く招待されていた。3 日間を通して基調講演は 12 本、研究発表は 60 本、ワークショップは 30 本であった。このほか、いわゆるコマーシャルプレゼンや、授業研究 (Lesson Study) のセッションが併催された。ただ、全体の発表数が多いものの、同一時間帯に基調講演は 3 本、研究発表とワークショップはそれぞれ 10 本が平行で開催されるため、聴講できる講演・発表数がかなり少なくなるのは残念であった。日本からの発表者は Damian J. Rivers, Hiroko Matsuura, Hiroko Suzuki, Kristjan K Bondesson, Masaki Oda, Miho Fujieda の各氏と JACET から派遣された筆者であった。

■主な講演・発表・ワークショップ

聴講した講演は 3 つである。Shirish Nadkarni 氏 (Livemocha) の講演 Creating Prosperity: Using the Internet to Revolutionize Language Learning では、氏が開発に関わった Livemocha というオンラインの英語学習プラットフォームが紹介された。Brock Brady (TESOL President), John Anthony Scacco (タイ駐在米国務省地域言語官), George Scholotz (インドネシア駐在米国務省地域言語官) の 3 氏による講演 Engaging English

Education in Asia: Shared Opportunities for Professional Growth では、TESOL や米国政府が英語（米語）教育の普及のためにアジア圏で行っている諸活動の紹介があった。

Donald Freeman 氏（ミシガン大）の講演 Language, Technology & Social Capital: Frames, Opportunities & Tools では、インターネット時代における情報と言語のインタフェースの変容が論じられた、

聴講した研究発表は多数に上るが、それらの大半は大会テーマに関係させて、「英語教育を通して即効性のある職業訓練を行い、良い会社への就職やその後の社会的地位の上昇につなげる」という趣旨の物が多く、地域の英語学習において道具的動機が非常に大きな意味を持っていることを改めて確認させられた。また、招待講師が講演の中で述べた”We are not diplomats, we are not university professors, but we are teachers!”という言葉にも示されるように、発表者・参加者は域内の中高教員や政府の教育政策担当者などが多く、言語学や教育学の諸理論をふまえて研究者が最新の研究内容を披露するという一般の「学会」のイメージとはかなり異なった雰囲気であった。

発表全体の雰囲気的一端を伝えるために、発表題目をいくつか拾ってみると、成人 ESL 教育での読解力向上法、授業研究と発問、21 世紀が要求する英語力をどうつけるか、APEC 地域のマルチメディア辞書の開発、オンラインでの授業研究の可能性、オマーン女性の英語力と企業の求める英語力のずれ、公認会計士学校での職業英語教育、グローバル経済化の中での英語学習動機の変容、企業リストラが採用方針に及ぼす影響と学生の意識の関係、就職での競争力を高めるためのビジネス英語力の指導、ブログを用いた作文指導、女性のポライトネス使用と職場の地位の関係、21 世紀の労働力としての学生英語力の評価法、などがある。多くの発表で触れられていたのが、日本発祥とされる「授業研究」である。授業研究は、近年、米国などでも注目されているが、東南アジア各国では、授業研究をより体系化・組織化して授業の質の管理に使おうとする動きが盛んである。なお、筆者は、現在進めているアジア圏の英語学習者コーパスプロジェクトについて紹介し、各国の学習者特性を把握しつつ、自然な英語表現力を育成するための教授法を域内で共同研究する必要性を主張した。発表後、早速、タイ、インドネシア、韓国の研究者から協力の申し出が得られたのは幸いであった。今後、JACET の枠組みとも関連付けて何らかの共同研究につなげていければと希望している。

講演・発表のほか、より即効性のある教授法や教授理論を求める参加者の要望にこたえるために、ワークショップも多数用意されていた。筆者が参加したワークショップは、ケンブリッジの O レベル試験における英文解釈問題の傾向を分析し、自分で実際に問題を作ってみるといったものであった。プレーンテキストを素材に、講師の指示に従って、どこを問題に取り上げ、どのような設問を立てるかを少人数のグループで議論するのであるが、大半の参加者は実際に O レベルを日々指導しているだけに、ディスカッションは大いに盛り上がった。

■ 終わりに

前述したように、SEAMEO RELC Seminar は独特の雰囲気を持つため、国内の英語教育関係の学会に慣れた日本人研究者には自分の研究を見直す新鮮な体験になるものと思われる。例年、開催時期が4月であり、日本人には参加しにくい時期であるが、ぜひ多くのJACET 会員に参加していただければと思う。発表をお考えのJACET 会員の方がおられれば、大会の様子や会場・日程の詳細など、可能な限りの情報提供をさせていただくので、個人的に連絡を取っていただければ幸いである。なお、秋のJACET 大会にはRELC より Melchor Tatlongjari 博士が来日予定である。JACET と RELC の絆がより深くなってゆくことを祈念して報告としたい。